

生活者の視点から考える スマートコミュニティ

ICTの活用で、エネルギー利用率や環境性の向上が進むスマートコミュニティ。一方、生活者はコミュニティに何を求めるのか、世界に先例のない超高齢化、単身化などが進む将来の社会像を見据え、どのような取り組みが必要となるのか。生活者の視点から、心豊かな暮らしを実現するスマートコミュニティのあり方を考察する。



住む価値が実感でき、 超少子高齢社会に対応できる コミュニティを目指して

① 人を中心として スマートコミュニティ を考える

ある講演会で、デンマーク大使館の方が、「日本とデンマークのスマートコミュニティの写真を比較して何が違うか？」と問いかけた。その答えは「人」であった。日本は、どのまちも整然とした施設の写真。一方、デンマ

ークは住む人の姿が常に写っていた。まちづくりの思想の違いが垣間見えた。国内各地でスマートコミュニティの実証・導入が進み、ICTをエネルギー利用に活用することで30%程度の省エネ・省CO₂の目途も立ち、その社会的意義は大きい。一方、人や暮らしが潤う姿が見えるスマートコミュニティが実現すれば、生活者がそのまちに住むことの価値を実感できる。世界に先例のない超高齢社会で心豊かに暮ら

したり、COP21の合意も踏まえた環境問題などに道を拓くことも望まれる。これまでのスマートコミュニティの検討はハードウェアからのアプローチが中心であったが、もうひとつの柱として、人をベースにコミュニティのあり方をさぐるアプローチが必要と考える。そこで、以下の目的に向けた検討を始めていく。

・生活者の視点からコミュニティを捉え、心の豊かさ、暮らしの質(Q

② ニーズからの検討

——生活者が
価値を感じる
コミュニティとは

〈生活者のニーズから
浮かんできたこと〉

生活者はコミュニティに何を求めるのか。心のうちをよりの確に把握する

ため、Lively Collaboratorという課題把握力などの研修を受けた生活者と、Chart 1のプロセスでニーズを導いた。36件のニーズが得られたが、次の点が浮かび上がった。コミュニティの希薄化が懸念されるなか、大阪のような都市部の生活者でも、個人の取り組みには限界を感じ、地域の人々と連携してQOLを高めたい意向が示されたのである。たとえば、近隣で空巣が頻発し

ても全くそのことを知らないことが多く、防犯は個人では限界があり、地域で取り組み、より安全に暮らしたい、ひとりでは負担だが、地域で協力して高齢者を見守りたい、地域で子どもを見守りたいなどのニーズが示された。新設のスマートコミュニティの入居者のターゲットとなる30・40代で、京阪神在住の一般生活者200人によってニーズの重要度を評価したところ、これ

らを重要とした人は160〜180人と最上位のニーズとなった。これに対し、現在のスマートコミュニティは、HEMS(*2)（家庭のエネルギー管理システム）などの個人向けサービスが中心となっている。ニーズを実現するコミュニティのつながりと、それをサポートするICTがあれば、生活者にとって新たな価値が生まれる可能性がある。

大阪のニュータウンにおける課題の実例をChart 2に示すが、高齢者の孤独死や、安心して子どもをひとり外で遊ばせることができないなどの切実な現状と、孤立化が懸念される中高年単身者やひとり親世帯が増えつつある変化などが見てとれ、社会課題の面からもコミュニティのつながりの大切さが浮かびあがってくる。他のニーズとしては、安全を意識し

Chart 1

生活者がコミュニティで感じる課題・ニーズ

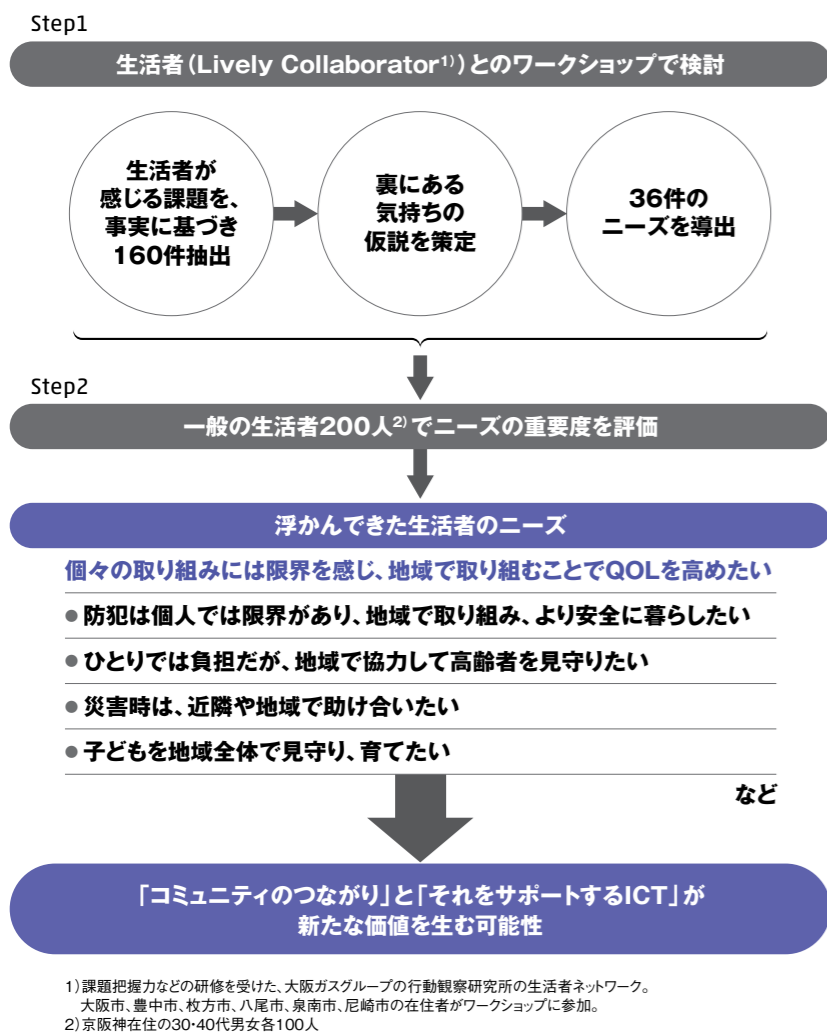


Chart 2

大阪のニュータウンにおける課題の実例

	課題例	実態・生の声
高齢者	●見守り ●生活支援	●単身者が増加し、地域で年間20〜30件の孤独死が発生 ●足が悪く、団地の上階への回覧板の持参等が辛く、親戚が来たときに手伝いをお願いしている など
子ども	●居場所	●親が安心して子どもを育てられない ・子どもの居場所がない ・団地は死角も多く、子どもを安心して遊ばせられない など
コミュニティ	●希薄化への対応	●顔なじみだが、3年間顔を合わせたことがない人もいる ●同じ棟では交流があるが、他はない など
中高年単身、ひとり親世帯等	●孤立の抑止	●中高年単身者の入居も増えており、孤立しやすい ●ひとり親世帯も増えている ●新規転入者はコミュニティとの断絶が起きやすい など

出典:「大阪府住宅供給公社 団地滞在型コミュニティ支援活動報告書」

たまちづくりや、地域の生活情報の提供等の利便性に関わるものが上位となった。

〈仮説〉 つながりが新たな価値を生む スマートコミュニティ

「コミュニティの新しい絆づくり」と「サポートするICT」により、個人の限界を超えた価値を生んでいく、つながりが新たな価値を生むスマートコミュニティが中長期的にも有効になるのでは、この仮説を立った(Chart 3)。従来の超高齢社会や、孤立しやすいひとり親世帯などが増加するなかでのコミュニティケア(共助)の実現、シェアする暮らし、地域の人々で連携した省エネ行動などにもつながる可能性がある。日本人の特徴として、人との結びつきや、利他に幸福感を覚えるとの報告もある。本点からもQOLにつながるということが期待される。

以前訪問した岐阜県の芥見東自治会連合会では、ICTは用いていないが、2400軒の全世帯で高齢者の見守りや生活支援を始めていた。個人を尊重し、大きな手助けは断るなどの理念を共有し、緩やかなつながりが実現されていた。このようなつながりとサポートするICTが結びつけば、接点を持ちにくい都市部でも実効が期待できる。人の欲求は段階的に、社会との関わりや自己実現などに向かうとも

言われており、近年はボランティアによる社会参加が増えている。将来に向けて可能性はあるのではないだろうか。

〈仮説の実現に向けて〉

京阪神在住の生活者から、高齢者を見守りたいけれども今は声掛けできる関係がない、子どもを見守りたいけれども顔も知らないなどの実情も示された。一方、今回の検討で、公園のイベント等で触れ合いたい、システムキッチンのある施設で料理を作り合いたいなどのニーズも抽出されている。そのため、本仮説の実現には、次の視点を持つことが重要と考えている。①イベント等を通じ、互いの顔をそれとなく知る②それらを機に、料理を作り合うなどの行動を共にする人が増えていく③災害時の共助や見守りなど、必要なときに地域で連携できるようになる、というように個別のニーズを満たしつつ、将来に向けてつながりを育んでいく「コミュニティ・マネジメント」の視点である。

地域で連携した防犯、高齢者や子どもを見守りなどの個別ニーズを満たす具体的内容も生活者と検討し、約30の取り組みを創出している。高齢者の見守りの一例をChart 5に示す。本例でも、単身高齢者は見守られたい、一方30・40代女性は見守りたい人が多いなど、各取り組みの実現可能性がうかがえた。今後は、実践に向けた課題や必要な施

策なども示していきたい。

なお、人の価値観は多様である。つながりを望まない人など、それぞれの意志が尊重され、自由な参加形態や、地域の事情に応じて何を行うかなどが柔軟に検討されるべきである。

3 将来の社会像 からの課題検討

——次世代に向けた ライフスタイルを 目指して

わが国における高齢化の進展や、2050年までに80%の温室効果ガスを削減する想定、世界の人口が1990年の53億人から2050年に97億人となり、食料などの資源をいかに有効利用していくかなどの諸課題がある。技術だけでは課題解決は難しく、コミュニティに住む人にとつての新しいライフスタイルを考えていくことが望まれる。そこで、東北大学大学院環境科学研究科の古川研究室と検討を開始している。古川研究室では、将来の環境制約や社会課題からバックキャストイングし、新しいライフスタイルを検討する手法と、全国各地の90歳前後の人に戦前の暮らし振りを聴き、継承すべき心豊かに暮らす知恵を抽出する手法を構築している。両手法をもとに、2030年頃を想定して、省エネ・省資源

や少子高齢化などに役立ち、かつ心豊かにできるライフスタイルづくりの検討を始めている(Chart 5)。本結果も今後発信していきたい。

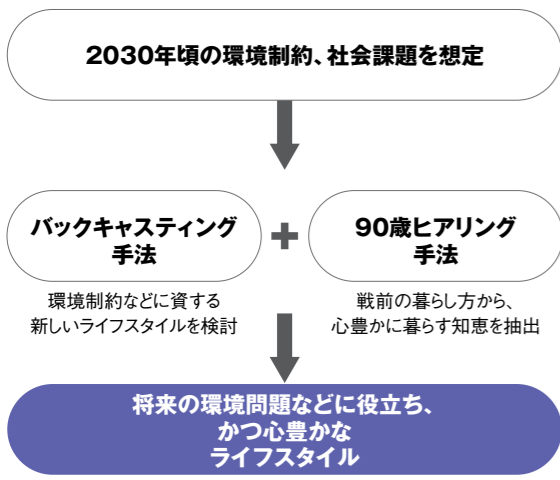
4 スマートコミュニティ を超えた展開へ

スマートコミュニティは、未来を拓く場である。本稿で述べた新しい挑戦を実現し、その成果を既存の地域にも広げていきたい。並行して、得られる知見を活かしながら、現在のコミュニティでも、順次導入を検討したい。成熟社会では、暮らしの質が求められ、本点からも重要な検討になると考えている。

最後に私事であるが、昨年マンションの理事長を務めた。コミュニティは多様な価値観や事情のある人々の生き暮らしの集まりである。決してコミュニティの外からきれいな絵姿をおしつけるものでないということを改めて実感した。紹介した内容は、あくまでもひとつの可能性である。地域ごとに住民が何が課題で自ら何をすべきかを考えて、議論していくことが最も重要と考える。それこそが、人が中心のスマートコミュニティだと言える。

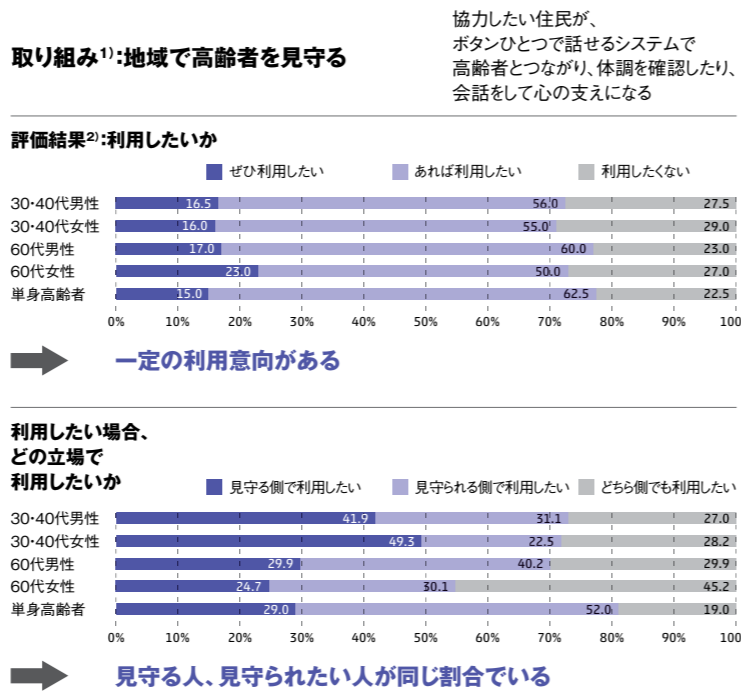
(*1)QOL: Quality of Life
(*2)HAMS: Home Energy Management System

Chart 5 社会課題からのアプローチ
新しいライフスタイルの創出



*東北大学古川研究室が構築した手法を活用

Chart 4 ニーズをもとに検討した
取り組みと利用意向の例



1)生活者(Lively Collaborator)とのワークショップで創出した取り組み
2)京阪神在住の30・40代、60代の男女各100人の一般生活者の評価結果(30・40代は、自分が高齢化するまでを考慮して評価)

Chart 3 仮説 つながりが新たな価値を生むスマートコミュニティ

